

第20回アジア知的障害者会議 (The 20th Asian Conference on Intellectual Disabilities) 参加報告

工藤 傑史

(教育研修・事業部)

要旨：アジア知的障害連盟が主催する「第20回アジア知的障害者会議」が、2011年8月21日から26日までの6日間の日程で韓国・ラマダプラザ済州ホテルで開催された。大会テーマは「自由を超えて幸福へ」。参加国は非会員国も含めて21か国・地域、参加者は1,567名（知的障害者本人が475名）であった。主な大会プログラムは、基調講演、全体会、カントリーレポート、研究・実践の口頭発表、ポスター発表、知的障害者本人参加の特別プログラム、その他「文化の夕べ」や「友情の夕べ」等の交流イベントである。日本からは155名（知的障害者本人50名）が参加し、参加者全体においても3割を占める知的障害者本人が口頭発表や本人参加の特別プログラムに参加し、交流を深めた。

見出し語：アジア、知的障害、知的障害者本人参加

I. はじめに

知的障害者の完全な社会参加と均等な権利保障を目指し、アジア知的障害連盟の会員国が2年ごとに開催する「第20回アジア知的障害者会議 (The 20th Asian Conference on Intellectual Disabilities)」が、“自由を超えて幸福へ (Passing from Freedom to Happiness)”のテーマの下に、2011年8月21日～26日、韓国、ラマダプラザ済州ホテルで開催された（主催：アジア知的障害連盟 (Asian Federation on Intellectual Disabilities)）。

参加国・地域は非会員国も含めて21か国・地域（オーストラリア、バングラデシュ、中国、香港、インド、インドネシア、イラン、日本、韓国、ラオス、マレーシア、モンゴル、ネパール、パキスタン、フィリピン、シンガポール、スリランカ、台湾、タイ、U.S.A、ベトナム）、参加者は1,567名（うち知的障害者本人が475名）、日本からは155名（うち知的障害者本人が50名）であった。主な大会プログラムは、基調講演4、全体会7、カントリーレポート8、研究・実践の口頭発表83、ポスター発表43、知的障害者本人参加の特別プログラム5、その他、「文化の夕べ」や「友情の夕べ」等の交流イベントである。本会議では、全体会議（基調講演、全体会、カントリーレポート）が韓国語、英語、日本語で同時通訳された。

筆者はアジア地域の知的障害教育に関連する情報収集のため本会議に参加した。本稿では会議概要と知的障害者本人参加の特別プログラムについて報告する。

II. 会議内容

1. 会議日程

- 8月21日（日）事前ワークショップ、理事会
- 8月22日（月）開会式、基調講演Ⅰ、全体会Ⅰ、カントリーレポートⅠ、口頭発表、本人参加プログラム（討論会Ⅰ）、歓迎パーティ
- 8月23日（火）基調講演Ⅱ、カントリーレポートⅡ、口頭発表、本人参加プログラム（パフォーマンス、討論会Ⅱ）、文化の夕べ
- 8月24日（水）スタディツアー（施設見学）、支援者交流会
- 8月25日（木）基調講演Ⅲ、全体会Ⅱ、口頭発表、本人参加プログラム（済州島の遊び体験、映画上映会）、友情の夕べ
- 8月26日（金）基調講演Ⅳ、閉会式、総会

2. 全体会議の概要

全体会議は、8月22日(月)、23日(火)、25日(木)の三

日間にわたり、基調講演、全体会、カントリーレポートにおいて、様々な立場の人々から多様な演題で講演が行われた。(演題と講演者については表1参照)。

四つの基調講演は、インクルーシブ教育、地域支援、家族支援、雇用問題、といずれも知的障害者をめぐるタイムリーな内容であった。基調講演Ⅲ「支援雇用を通しての幸福の実現」はアメリカにおける障害者雇用事情についての報告であった。障害者が

支援者の協力を得ながら、自分の夢や希望の実現に向けて、はじめは個人事業主として会社の仕事の一部を分けてもらい、徐々に実績を上げながら、後に正式な雇用につなげていく事例が報告され、日本から参加した関係者等の関心を集めていた。基調講演Ⅳ「インクルーシブ教育の探究」は、日本におけるインクルーシブ教育システム構築へむけての制度改革の経過についての報告であった。

また、全体会、カントリーレポートにおいては、

表1 全体会議の演題と講演者

8月22日(月) 9:00-12:40 <基調講演Ⅰ> クン・キム(カナダ・オンタリオ州登録心理学者)「インテグレーション?今、東洋の知恵が求められている」 <全体会Ⅰ> 1. フィズ・ボロ(香港大学)「自由から幸福へ、教育におけるインクルージョンの鍵は?」 2. クン・シクミン(サムヨクリハビリテーションセンター:韓国)「知的障害者の幸福のためのICF」 3. サチダナンド・スリバスタバ(知的障害福祉協会:ネパール)「ネパールにおけるインクルーシブ教育」 <カントリーレポートⅠ> 1. 谷口奈保子(NPOパレット:日本)「地域における知的障害者の自立生活の新しい形」 2. テレスタ・インシオン(フィリピン精神遅滞協会)「自立に向けての移行プログラム」 3. プラミラ・バラスンダラム(サマダン:インド)「知的障害分野における発展の10年」 4. スン・エ・キム(テグ大学)「韓国におけるインクルージョンの現在とこれから」
8月23日(火) 9:00-12:30 <基調講演Ⅱ> ウェン・ザン(重慶師範大学)「地域リハビリテーションサービスと地域に根ざした家族支援」 <カントリーレポートⅡ> 1. ジョワホル・イスラム・マン(SWIDバングラデシュ)「バングラデシュにおける知的障害者」 2. スナティン・ハブサラ(インドネシア国立知的障害者福祉連盟)「知的障害児の臨床プロフィール」 3. タエ・ファン・クアン(韓国教育省)「韓国の特別教育施策の動向と課題」 4. ジャ・ラン・イ(韓国健康福祉省)「韓国の知的障害者施策の現状と課題」
8月25日(木) 9:00-12:40 <基調講演Ⅲ> クリスティーナ・キム(カリフォルニア大学・ロサンゼルス)「支援雇用を通しての幸福の実現」 <全体会Ⅱ> 1. オトブリン・ユラ(モンゴル:福祉労働省)「モンゴルにおける認知障害のある子どもの支援の現状」 2. ティ・タ・ハ・トウラン(ベトナム:国立小児病院)「ベトナムの障害者の現状と支援、2020年までの戦略」 3. ボナン・シダボン(ラオス・労働福祉省)「知的障害者支援」 4. シュンフ・ジン(中国:ヤンビヤン言語聴覚リハビリテーションセンター)「中国ヤンビアンにおける知的障害者支援」
8月26日(金) 9:00-10:30 <基調講演Ⅳ> 金子 健(明治学院大学)「インクルーシブ教育の探究」

各国の知的障害者への施策や動向、事例等について報告された。

3. 研究・実践の口頭発表

83の口頭発表が行われたが、テーマ別にみると、①学校教育および就学段階の教育実践やカリキュラム等に関するもの(25)、②学校から卒業後の雇用への移行に関するもの(7)、③情報教育・支援機器に関するもの(5)、④法的な問題や制度に関するもの(1)、⑤メンタルヘルスを含めた健康問題に関するもの(3)、⑥医学的な問題に関するもの(1)、⑦自立(自己決定・セルフアドボカシー)と社会参加、家族問題に関するもの(17)、⑧リハビリテーションに関するもの(1)、⑨早期発達に関するもの(7)、⑩インクルーシブ教育に関するもの(3)、その他(知的障害教育全体に関わる調査等、他)(13)であった。

Ⅲ. 知的障害者本人参加

本会議においては、総参加者数の約3割が知的障害者本人であったが、口頭発表や本人参加の特別プログラム等において充実した参加の様子が見られ、本大会が知的障害者本人のための会議でもあるという印象を強く受けた。日本からの本人参加についても同様であった。

1. 本人による論文発表

前述の83の口頭発表に知的障害者本人による発表が含まれていたが、そのうち、8本は日本から参加した知的障害者本人による口頭発表であった。**表2**は演題と発表者である。発表内容は8本とも自立と社会参加に関する内容であった。本人による英語での発表や通訳を通しての発表であったが、自らの体験や活動、生き方について写真等でわかりやすく伝える発表であった。

2. 本人参加の特別プログラム

本会議では、本人参加の特別プログラムとして、テーマ別討論会が2つ、本人たちがパフォーマンスを発表するショープログラム、韓国済州島の伝統的な遊びを体験するプログラムが行われた。



写真1 本人参加プログラム・討論会Ⅰ

表2 知的障害者本人による口頭発表(日本)

金森 賢一(社・日本発達障害福祉連盟)	障害のある人もない人も
杉澤 哲哉(社・日本発達障害福祉連盟)	本人活動連絡協議会(Self-Advocacy Japan)の活動
奈良崎 真弓(社・日本発達障害福祉連盟)	本人活動と東日本大震災
明石 徹之(社・日本発達障害福祉連盟)	ありのままに当たり前に地域に生きて～そして僕はひょうきんな公務員になった～
正村 幸子(社・日本発達障害福祉連盟)	今のしあわせとこれからのしあわせ
小長谷 英高(神奈川自立生活センター)	ドイツ・ベルリン大会と私たちの暮らし
田中 康奈(社・日本発達障害福祉連盟)	女子高生になりました
蓬田 祥子(手作りクッキーおからや)	ステップ&ジャンプ～前向きに未来に向かって～

1) 本人参加プログラム「討論会」

討論会Ⅰでは、テーマ「差別」を取り上げ、知的障害者が制作した「いじめ」に関連した自主映画をもとに、各国から選出された討論者（本人）とフロアーの参加者も参加して、活発な意見交換が行われた（写真1）。討論会Ⅱでは、「恋愛と結婚」をテーマに同様の討論が行われた。

2) ショープログラム

ショープログラムでは、ピアノ演奏、ギター演奏、ハンドベル演奏、人間ジュークボックス、ダンス、パントマイム、自作の作品の発表（歌とピアノ）が行われた。日本からはパントマイム劇団「湘南亀組」のメンバーが風刺を込めた多彩な内容の作品を発表し、喝采を浴びた。

3. 「若竹ミュージカル」のStar Raft Award（星槎賞）

受賞とドキュメンタリー映画上映会

本会議の開催に合わせて、各国から推薦されたすぐれた活動をしている団体に贈られる「Star Raft Award（星槎賞）」の表彰が開会式で行われ、①韓国済州島における最初の社会福祉法人として地域に様々なリハビリテーションサービスを提供してきた社会福祉法人“choonkang”，②35年間にわたり障害のある子どものデイキャンプを行ってきたフィリピン遅滞協会（PAR），③特別支援学校の卒業生を対象に家族や地域の支援者とともにミュージカル活動をしてきた「若竹ミュージカル」（東京学芸大学附属特別支援学校若竹会）の3団体が選ばれた。

「若竹ミュージカル」の受賞については、同団体の活動を撮影したドキュメンタリー映画「空想劇場ー若竹ミュージカル物語」（金聖雄監督）の制作も受賞理由に含まれていたこともあり、同映画の上映会が企画され、映画の主演である本人たちの舞台挨拶や「友情のタベ」でのステージ発表も行われた（写真2・3）。

IV. おわりに

本会議に参加していた多くの知的障害者本人たちの様々な活動や交流場面に接し、その可能性に勇気づけられた。本人たちの参加体験が多く仲間へ伝えられ、知的障害者本人の参加・交流がより発展的に進むことを願う。

（掲載写真については、本人、保護者の了解を得ています。）

参考文献

The 20th Asian Conference on Intellectual Disabilities
PROGRAM & ABSTRACTS BOOK.

第20回アジア知的障害会議プログラム資料. (社)日本発達障害福祉連盟.



写真2 映画上映会終了後スナップ



写真3 「友情のタベ」でのステージ発表